

「青春ブタ野郎」シリーズ短編集

牙無し

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

電撃文庫 出版

鴨志田 一 先生原作

2018年秋アニメ放映

「青春ブタ野郎」シリーズの短編集を公開しています

原作ライトノベルのネタバレを含んだ話も多いため、各巻時間軸ごとに見出しをつくっております

pixivにも併せて公開

一部カクヨムにも併載

目次

1巻「青春ブタ野郎はバニーガール先輩の夢を見ない」 作中・以降 持つべきものは	1
5880秒ぶんの価値	7
5月に芽吹いたミオソテイス	13
2巻「青春ブタ野郎はプチデビル後輩の夢を見ない」 以降	
私の先輩を紹介します	30

1巻「青春ブタ野郎はバニーガール先輩の夢を見ない」作中・以降
持つべきものは

「ずいぶん、入れ込んでんだな」

バイト先のファミレス。猫の額ほどしかない空間のほとんどを柵と机が支配している休憩所で、そう口火を切ったのは佑真だった。

珍しく佑真の部活がないせいとか、シフトの入りも休憩時間も被っていたその日。

咲太と同じ制服のポロシャツの上に好奇心を覗かせた瞳がある。

主語を欠いた不躰な言葉を咀嚼するように間を置いて、咲太は自分の手に持っている物を目の高さまで持ち上げて振るった。

「……コーヒーがか？」

「違うって。っていうか、缶コーヒーに深入りも浅入りもないだろ」

「まあな」

休憩時間にと店前の自販機で買った110円の缶コーヒーだ。

咲太は同意とともに口をつけながら、目の前の数少ない友人の言葉の意味を考えた。

佑真は具体的な固有名詞まで出す気はないらしい。

出さずとも咲太なら察するだろうと確信している表情だった。

こちらとしても思い当たる節が多いわけではない。

十中八九、話題の中心は高校のひとつ上の先輩、桜島麻衣についてだろう。

佑真とは先日の登校途中の電車で話題に出したし、ここ数日彼女目当てに校内を動き回っていた自覚もある。

傍目から見れば、なるほどこれは確かに「ずいぶん入れ込んでいる」状態だ。

「国見にデバガメの趣味があるとは思わなかった」

「他の人ならもう少し遠慮はするって」

「僕に遠慮はいらないと?」

「咲太にはあからさまな遠慮とか気遣いとか逆に邪魔だろ?」

小気味のいいテンポで返ってきた返答に、眉根を寄せる。

邪魔とはどういうことだ、親元を離れバイトに勤しむ苦学生を何だと思っているのか。

反射的に聞こうとして、やめることにした。墓穴をせっせと掘っている自分が脳裏に浮かんでいる。

結局、沈黙を呑み込むようにもう一度コーヒーに口をつける。

露骨な時間稼ぎ。あからさまに話題転換を求めて国見を見つめるが、佑真がこの話題をもう少し続けたいらしい。

憎らしいぐらいに整った面構えに見飽きて、チリチリと寿命が近い蛍光灯を見上げた。

これは誤魔化せないか。浅くため息が漏れる。

「そう見えるか?」

唐突な疑問だが、曖昧な指示語がどこに繋がる言葉かを佑真は即座に理解してくれた。

「双葉との話題に上るぐらいには」

「ふたりでなに楽しそうな話してるんだよ。そういうのは僕も混ぜろ」

「当事者は咲太だって」

相変わらずな調子の咲太に、佑真はクツクツと笑う。

室内競技部のクセに浅く日に焼けた肌が、ハッキリとした目鼻立ちで整った顔から覗く歯の白さを際立たせている。

楽し気に笑うだけでこれなのだから、上里が全方位に嫉妬するわけ

だと咲太は妙な納得をしていた。

だからといって度々目の敵にされるのは勘弁してもらいたいが、
佑真から視線を外し、どこことなく彷徨わせる。

「ま、僕が子どもの頃から有名な女優さんだからな。

ちよつときつかけもあつて、お近づきになりたいって下心がある」
「……ふうん」

全く信じていない様子で、佑真は鼻を鳴らした。

さつきと同じように目元を細めているが、そこに宿る意味は少し異なっているだろう。

年下の言い訳を寛容な心を持って聞いている年長者のような。

あるいはあからさまな建前を聞き流しているような。

実際苦しい言い訳だな、と咲太自身も思う。

「結果、地雷を踏んづけて怒らせちゃったけどな」

「なるほど」

「こういうときってどうすりゃいいんだ？」

「自分が悪いと思ってるなら、とにかく早く面と向かって謝るべきだろ。
内容がわからない分何とも言えないけど」

「その面と向かうことすら避けられてるんだから困ってんだろ」

そりや八方塞がりだな、と呑気に佑真は笑った。

完全に他人事な調子だ。そして現実、他人事だ。

当事者の咲太がなんとかして、コンタクトを取るしかない。

次に会ったときにきちんと話すしかない。

そのための準備はしているのだ。

デジカメに納められた自分の傷を思い出して、どこか胸にかゆみを
覚える。

シクシクと疼く感覚。たぶん気のせいだ。

そんな咲太をしり目に、佑真はどこか得心したような、すつきりし

た表情になっていた。

「なんだかバタバタやってるから気になったが、やっぱ咲太は咲太だな」

「国見。お前は僕をいつたいどういう風に見ているんだ？」

「どうって、どうだろう？ まあ迷子の子がいたら迷わず目線の高さまで膝を曲げて話しかけられる奴だとは思ってる」

「……まだそういうシチュエーションには出くわしたことがないな」

自信満々でどこか誇らしげに言われてしまって、出来の悪い返ししかできないかった。

少なくとも、自分にそんな評価が付くのは咲太にとっては初めてのことだ。

仮に今後、そういう状況になったら自分はどう動くか。

わからない。そんなことはいざその場になってみないことには、想像もできないだろう。

事前に何らかの確信を持っているなんて、自意識過剰もいいところだ。

けれど国見がそういうならきつと自分はそうするのだろうか、と咲太は思った。

どこかピント外れで無責任な信頼。それとも友人にそんなことを確信されてるから、そういう行動を取ろうと思うのかもしれない。

どちらにしろ、やはり佑真にこの質問は藪蛇だったようだ。

さて、と。という佑真の声と、少し古いパイプ椅子の悲鳴が休憩室に響く。

僅かに先に入った佑真の休憩時間は終わりのようだ。

扉へ向かうすれ違いざまに、咲太の肩に手を置かれた。

「まあ、何か困ったことがあれば、いつでも相談しろよ」

気負いもなければ、裏の意図など微塵も感じられない善意の言葉だった。

こういうことを、嫌味なく、真っ直ぐに言えてしまうとところが国見佑真なのだ。

しかもそういう姿が物凄く似合ってしまう。

本当に上里の苦労が偲ばれる。転じて自分の苦労も偲ばざるえない。

なんだかこのまま出ていかれると謎の敗北感を味わってしまいそうなのだ。

男としてのプライド、というにはあまりに小さい何かが咲太の口を滑らせた。

「やっぱ彼女持ちは違うな」

「へへへ、まあな」

「嫌味なんだから少しは怯めよな」

わずかな抵抗もあえなく撃沈。

手が離れ、出入口へ向かう佑真の背中に苦し紛れの言葉を投げる。

「困ったら深夜でも遠慮なく電話してやるからな」

「母さん寝てるかもだから、せめて家電話じゃなく携帯にかけてくれよ」

振り返らずに手だけ上げて、今度こそ佑真は休憩室から出て行った。

これは完全敗北。休憩室に残されたのは、哀れな哀れなピエロ。

あゝ、と咲太は意味もない声を上げるしかなかった。

ここまできると腹も立たない。そもそもそんな悪感情を持つ道理すらないのだが。

腹の底がモニョモニョとするような、胸の奥の風通りが良くなるような。

吐き出すだけ声と息を吐きだして、残り僅かな缶コーヒーを一気に煽る。

舌の先に慣れた苦味が残った。

人の目に映らなくなった、元有名人の先輩。

思春期症候群。

自分から関わることを決めておきながら、不安はある。

当たり前だ。新しい誰かと積極的に関わるということを、しばらくやってこなかったのだから。

かつてわかって欲しいと必死に伸ばした手は弾き飛ばされて、咲太はひとりきりになった。

そうして理解した現実があつて、諦めてしまったものがあつた。けれど――。

それでも、手さぐりな昨日までより気分は楽になっている自分がいる。

今の捻くれた自分でも気にかけてくれている奇特な奴がいるのだ。

「持つべきものは、顔も性格もイケてる友人だな」

本人には絶対言う気のない言葉を空になった缶と一緒に吐き捨てて、少し早い咲太も職場へと戻ることにした。

5880秒ぶんの価値

異性の後輩を連れ立っての外出は誰かさんの遅刻から始まった。

ロスは1時間と38分。予定した鎌倉観光は大幅な変更を余儀なくされ、麻衣と咲太は鎌倉高校前で下車をすることになった。

今しがた自分たちの乗っていた江ノ電を右手に見送って踏切を渡ると、七里ヶ浜へと向かうための最後の足止めとなる国道134号線の信号を待つ。

この信号がなかなか青にならないことは、この浜辺を頻繁に利用する者たちの間では有名なことだ。

早歩きで先を行く麻衣を追いかける。

浜風が運ぶ潮騒は、線路を滑る電車が駆け抜けていった後の静寂を際立たせる。

麻衣は信号の前で、咲太へと向き直ると腕を組んで見せた。

何かを待ち構えるような、何かを要求するような。

どこか演技がかっていながら、不思議と堂に入っている。

動作ひとつでこれだけ雄弁に表現ができるのだから、子役時代から活躍し続けている女優というのは伊達ではない。

「それで、何か言うべきことはある？」

露骨に言葉を区切り強調するように、麻衣はハッキリと口を動かして咲太に問いかけた。

唐突な問答は夜掛けの奇襲のようなものだ。追いついた途端投げつけられたその問いに、咲太は目を丸くする。

なんだか女子特有の若干理不尽な脳内当てクイズみたいだなと思った。「私が何で怒ってるかわかる？」なんて、幻聴。

お付き合っているみたいでそれもいいな、と取りあえず前向きに解釈する。

気持ちは前向きにしたが現実問題どうしたものか。

お世辞にも良いとはいえない頭を絞る。そもそも前提として、眼前の先輩に限ってその手の「イマドキの女子高生らしい」ことをするような人かというのが疑問だった。

理不尽な無茶も、手の込んだ意地悪な要求もするだろう。咲太を困らせて楽しみたがる場所も短い付き合いのなかであったが、根本的には麻衣は筋が通らない言動が嫌いな気質だ。

意図的に人を行き詰らせたり、正解にたどり着けない問題を出題することはしない気がする。

むしろ相手に何とか解ける問題を出して、解けなければ「どうしてできないのか」と落胆するタイプだ。

この問いかけも、今までの会話のどこかから繋がっていると考えるのがもつともらしい。

一体、どれのことだろうか。

情けない話、本日の咲太は失敗続きだ。

待ち合わせには遅れるし、遅れた原因が女子であることもバレた。

昔話の流れで初恋の女性についても話してしまった。

これではお兄ちゃん大好きを自称する妹でもフォローできないレベルのダメダメっぷりだろう。

……いや、これぐらいなら何とかフォローしてくれるかもしれない。

七里ヶ浜の海岸沿いをなぞるように、国道134号線を車が駆け抜けていく。

足を止めて脇を抜ける軽乗用車の作った風が麻衣の黒髪を巻き上げる中、咲太はその一言を口にした。

「ごめんなさい」

「何について？」

間髪もなければ、容赦もない追求だった。

「……鼻からポツキーを食べなかつたこと？」

「さく た？」

確信して導き出した正解から最も離れた回答に、綺麗なタンキングで名前を呼ばれる。

下手糞なはぐらかしへの警鐘。音に物理的な圧力を感じた。笑顔にすら圧迫感を感じる。

怖い。けどやっぱりかわいい。

「駅で言ったでしょ？ 『遅刻の言い訳をして、私に誠心誠意許しを請いなさい』 って」

「……ああ」

理解に数秒、遅れて麻衣が言わんとしていることを理解する。

確かにあのとき言い訳まではしたが、肝心の謝罪がなおざりになっていた。

だとすれば、するべきことは明白だ。

「すみませんでした」

キチンと直立から、45度を意識をしてお辞儀。改めて咲太は謝罪をした。

麻衣の視線は電車を降りてから海岸に向いていた。

信号を渡れば20段ほどの段差を降りて、七里ヶ浜の浜辺。

おそらくちゃんとデートをする前に、このタイミングで今日の散々な体たらくの襖を済ませてしまえという、麻衣なりのサインだろう。

ありがたい気づかい。この機会を逃すほど咲太はバカにはなれない。

薄い茶色が揺れる頭頂部を見つめ、腕を組んだままの麻衣は思わず吐息をこぼした。

「ちゃんと謝れるなら、駅の第一声でやりなさいよ」

やればできる子どもを諭すような口調になったのもやむおえない。

「麻衣さんが1時間半も待っていたことが嬉しくて」

「嬉しくて偽物呼ばわり？」

「あまりの嬉しさに思わず思ってることしか口から出ませんでした」
「その後は生足要求だったし」

「そっちについては今でも残念に思ってます」
頭を上げるや大真面目な顔で言っただけの咲太に、麻衣は睨みを利かせる。

しまった、と若干わざとらしさすら垣間見える反省の表情に、いよいよ麻衣は閉口する。

雄弁な沈黙を目一杯に作って、眼前の生意気な後輩を見据えた。

一見図太く、軽佻浮薄。尊大とも思える無遠慮な言動。

けれどもそんな軽口を叩く口元に反して、目は冷静だ。物事の流れを見ている。

年不相応のアンバランスな温度差。

芸能界でも、ときどき見かける。

カメラの前では派手なことも、過激なことも言うけれど、その実「言って許されること」と「言っただけいいタイミング」をかき分ける観察眼と嗅覚が優れている人。

お笑い芸人さんに多い傾向がある。だいたいそういう人はテレビの業界でも永く起用されていることが多い。

つまるところ、梓川咲太は「空気を読む」のが人並以上に上手いのだ。

間違っても状況把握ができなくて、致命的な一言を言うような迂闊な人間ではない。

壊滅的な崩壊は器用に避けながら相手を揺さぶり、相手から自分を突き放して貰ったりなんて芸当ができるタイプ。

それが先天的にそうなのか、後天的に磨かれたものなのかどうかはわからないけれど。

けれど――。

けれどそうわかっているからだろうか。

過剰なまでの道化めいた言動は、彼の軟らかな素顔を覆い隠す外殻のようにも感じる。

危うい脆さを感じるのは、今さつき彼の難儀な生い立ちを聞いたせいだろうか。

敢えて放たれる神経を逆撫でる言葉に、少し覗き込む破れかぶれな心のやわ。

捨て身、いや捨て鉢。

自分から他人が離れていくことを、どこかであらかじめ念頭に置いた割り切りの意識。

それは本当に丁寧に覆い隠されていて、皮膚感覚でようやくわかるような僅かな違和感。

傷つきすぎて、擦り切れた感情の欠片。

慣れていても何か磨り減るものだと、七里ヶ浜駅の咲太の言葉を思い出す。

身を二つに引き裂いてしまうかのような、彼を胸の三本傷を思い出す。

138号線を跨ぐ信号が青になった。

一向にお叱りを貰えない咲太は、訝し気な顔で麻衣を覗き込む。幸いにして、2人の横断を待つ車はまだなかった。

「……麻衣、さん？」

気に入らない。それが麻衣の今の素直な気持ちだった。

試されているのだ。その他大勢と同じように、桜島麻衣が試されている。

そこが一番癪に障る。

それは女優のプライドか、先輩としてのプライドか。

勝手にお節介焼いて、危ない橋を渡って、人を焚きつけて、前に進ませようとしているのに。

「咲太」

「はい」

「そういう振る舞いで、私が咲太への態度を変えろと思わないで」

芸能界は時間に厳しい。ひとりのルーズな振る舞いが、出演者・スタッフ何十人の進行の遅れに繋がる。

子役時代からそんな世界に身を置いていた麻衣には、そういう価値観が染み付いている。

それでも1時間と38分。他の誰でもない、桜島麻衣が待っていた意味を彼は少しは自覚してもいいのではないか。

予想外の方角からの言葉だったのか、咲太は茫然と麻衣を見つめる。

その間抜け面に、少しだけ麻衣の溜飲が下がった。

意図を量ろうとする咲太に補足も何も付け足さず、麻衣は七里ヶ浜へ向かい横断歩道を歩きだす。

後ろから自分を呼ぶ焦った声に、小さな悪戯が成功したときのような浮足立った気分になった。

説明なんてこの生意気な後輩にはいらないだろう。あれだけ言えば、上手に汲み取って答えにたどり着くことぐらいわけないはずだ。

そもそも今日本の目的は別にある。

あまり会いたくない人と会わなければならない。

やりたくないことだけど、やっておかなければ前に進めない。

やるべきことをさっさと済ませて、その後は。

この捻くれた後輩と過ごすのもきつと悪くないはずだ。

横断歩道を渡り切る。夏を迎える前の七里ヶ浜の蒼が、麻衣を迎えていた。

5月に芽吹いたミオソティス

とある宗教において、世界の最期には天空の使者がラツパを高らかに吹き上げるのだという。

それは終末を誘う音で、それは消滅を誘う音で。

神が世界を作った日取りと同じ数。7度鳴り響く。

私にとつての最期の音は、そんな荘厳さとは無縁の些細な音だった。

カラリ、と彼の手から零れたシャープペンシルが机を跳ねる。ただそれだけの音。

あつけなく、拍子なく、乾いた音。彼の意識が落ちた音。

どこか彼を思わせる間の抜けた音だったけれど、そうして私は世界から入滅した。

まるで、テレビの電源を落とすように――。

意識があると人は無意識に支える人の補助をしようとするらしい。膝を曲げたり、筋肉に力を入れたり。力を分散させることで背負う人を助けるとか。

つまり気を失い、脱力した人は重たい。

中学時代に出演したバラエティ番組かなにかで、そんな雑学を言っていた気がする。

「咲太、重たい」

私は肩を貸すように支えている少年に、つつけんどんな言葉を投げつける。

自分で強引に寝かしておいて、なんて身勝手な話だ。

世の中じゃかつて「娘にしたい子役」ナンバー1なんて評価も頂いていたこともあったというのに。

長く身を置いた業界でも「桜島麻衣」に求められる品行の良さを常

に保ち続けていたというのに。

梓川咲太。この生意気な後輩の前ではそんな面をついぞ見せることはなかったと思う。

意地悪で、素直じゃない子だったと思う。でもしようがないじゃない。

い。
捻くれて冷めたようなことをいうクセに、こちらの事情を知ったことかと土足で踏み込んできて。

大事なことがなにか、やりたいことがなにか。2年間背けてきたものを目の前に容赦なく突き付けてきた。

誰もが空気を読んで見て見ぬ振りを「してくれていた」私を、真っ直ぐに見つめていた。

わがままな私も、女王様気取りな私も、気分屋な私も、全部をひつくるめて楽し気に受け入れてくれた男の子。

私を見失わないでくれた最後の人。

早生まれなら17歳。食べ盛り育ち盛りの男の子の全体重が、身体にのしかかっている。

彼が目覚める様子はない。

肩を貸すというより、半ば引きずるような状態だった。

その重さに手こずる反面、安堵しているのも事実だった。

抜け目のない咲太のことだから、こちらの小細工を見抜いて狸寝入りしている可能性もないわけじゃないから。

少なくとも私がこうやって四苦八苦している様子を感じ取れば、実は人の良い彼のこと。何かアクションを起こしただろう。

自分で一服盛つといて酷いなあ、なんてぼやきながら。

それでも麻衣さんとこんなに近くで触れ合えてうれしいなあ、なんて能天気なことを言うに違いない。

そしてそんな都合の良い期待をしている自分がないといえれば、きつとそれも嘘なのだろう。

どうしようもなく愚かな矛盾。その片方に目を瞑る。

ほんの数メートルの距離をカメの歩みのようにゆっくりと進め、もつれ倒れ込む様にベッドへと飛び込んだ。

少々乱暴な形にはなったけれど、それでも咲太が目覚ます様子はない。

ずっと変わらず一定の調子で、安らかな寝息を立てている。

「……バカ」

いったい、いつから寝ていなかったのか。

これは昨日今日の話ではないはずだ。

目の下に歌舞伎役者みたいな盛大な隈まで作って。

鼻を摘んでみても、咲太は身じろぎひとつしなかった。

私を忘れないために眠らない、なんて無茶も良い所だ。

そんなの何の解決にもならない、ただの時間稼ぎ。

その間に根本的な解決方法を探そうとしていたのだろうか。徐々に

に回らなくなった頭で。

勝算のない無茶苦茶な話だ。支離滅裂で、デタラメで――。

けど、必死だった。

必死に私をこの世界に繋ぎ止めようとしてくれた。

「ばか。……ばーか。さくたのばか」

子守唄を歌うように、静かに言葉を重ねる。

柔らかな淡い茶色の前髪を指先で掬い上げてみる。

吐息さえ、届く距離。

こうやって一緒のベッドに身をゆだねるのは数日振りだ。

色気のある展開になっていないのも同じ。

何の憂いも苦しみも感じられない寝顔を見て、自分の選択はきつと

間違いではなかったのだとようやく思えた。

梓川咲太。県立峰ヶ原高等学校の2年1組。頭の文字が「あ」だから、たぶん出席番号は1番か2番か。

薄い色素の茶色のクセつ毛に、イマイチやる気があるのかわからないような気だるげな瞳。

口を開けば減らず口ばかりで、全然素直じゃない。

今時スマホもケータイも持っていない珍しい子。

学校では過去の無責任な噂のせいで孤立気味。けれどそんな状況

に不満も不安も抱かずにスツキリと割り切ってしまった。

ご両親とは離れて妹とふたり暮らし。炊事も洗濯も掃除も家計の管理も、今は全て彼が担っているらしい。

捻くれ者で、その上妙に凶太くて、生意気なひとつ年下の後輩。

優しい人。

自覚的に誰かに優しくできる人。

自分の優しさを与える相手を、きちんと選べる人。

誰かのために必死になれる人。

誰かのための行動に陶醉することなく、優しさを与えられる人。

その優しさが向けられていた3週間、きつと私は幸せだったのだ。

お互い牽制し合い、じゃれ合うような会話は楽しかった。

デートに遅刻されたときは腹立たしかった反面、何かあったのかと心配だった。

海岸であの人と会うときに、背後にいてくれただけでどれだけ心強かった。

目に映るすべて単調だった2年の中で、この3週間だけが鮮やかな色合いを見せていた。

「ありがとう。咲太」

図書館で私を見つけてくれてありがとう。

そっけない私に根気強くかまってくれてありがとう。

やりたいことから目を逸らし続けてきた私の背中を叩いてくれてありがとう。

誰の目からも映らなくなった私の手を、最後まで引いてくれてありがとう。

私を、諦めないでくれてありがとう。

髪を撫でていた指先が頬へと滑る。

確かめるように輪郭をなぞり、だらしなく半開きになった唇の端へと行きつく。

決断は一瞬。迷いは微塵もなかった。

指先ではなく手のひら全体で頬を包み込む。

——導かれるようにその唇に、自らの唇を重ねた。

中学卒業と同時に芸能活動を休止してよかったと思う。

彼と出会ったからとか、ロマンチックな理由ではなく。それもないわけではないけれど。

あのまま活動していたら、きつとこんな形の「初めて」じゃなかったなんて、現金な理由。

マウスとウマウス。

行為自体は単純なくせにひどく頭の中がフワフワするのは、その意味と価値を知っているせいだろうか。

触れ合うだけのそれにするつもりだったはずなのに。

もっと上手くやれる自信があったのに、全然きこちない。

思考がボロボロと拡散していく。

口を塞がれて、呼吸をしづらくなつた咲太が少し身じろぐ。

それでも逃がすまいと余っていた片手で、彼の服を掴んだ。

はしたないと思った。自分にこんな一面があったのかと、脳裏に残る冷静な私が驚いていた。

鼻から抜けるように漏れた呼気が、自分のかわからなくなる。

自分の身体は、まだ彼の身体に物理的な影響を与えている。

その事実気づいて、背筋が栗立つ。人生の中で最も自分の存在を、強く自覚した瞬間だった。

数分か、数十秒か、数秒か。

狂った時間感覚に呑み込まれて、いつ離れたかも記憶おぼろげだった。

息を止めていたつもりはなかったけど、荒くなっていた息を吸って吐いて繰り返す。

視界がチカチカと明滅する。

バクバクと心臓の高鳴りが耳の裏から響いていた。

取り返しのつかないことをしたような焦燥感と、吐き気すら覚えるほどの高揚感があった。

乱れた息が整うまで、目を瞑ってうずくまるように彼の胸の中でその鼓動を聞いていた。

それでも、きつと世界は変わらない。

童話のように口づけひとつで起こる奇跡は用意されていない。

至近距離で囁められていた彼の眉も、元の平穏を取り戻している。

それでいいと思った。意識のない彼に何かを残せた気がした。

それは自己満足に過ぎないけれど、世界に取り残された私の唯一の爪跡な気がした。

泣いてはいなかったと思う。

見上げた視界が少し滲んでいたが、それでもちゃんとその言葉を口にすることができた。

「さよなら、咲太」

* * * * *

ゆつくりと、咲太を起こさないようにベッドから離れる。

ずっと寝顔を見ていたかったけど、今はそれをしてしまうと自分の内側に空腹感ばかりが募っていく気がして。

キスだけで満たされるものがあるなんて大ウソだ。心に注ぎ込まれた分、別の何かが大きくなっている。

唇の熱が全身に巡って、上手く処理できず軽い熱暴走を起こしていた。

未だに何か立ちくらみのような感覚がある。

少し頭を冷やすため部屋を出ようとしたそのとき、それを見つけた。

整理された机上の中央でこれ見よがしに置き去りにされた大学ノート。表紙にも教科名は何も書かれていなかった。

妙に気になったのは、学校で使ってるにしては真新しいクセに、ところどころヨレていて使用感にじみ出ていたからか。

試験対策に作ったノートだろうか。あのコンディションで。

何気なしに手を取る。

思わず、息を呑んだ。

「これ……」

そこにあつたのは関数や方程式でも、現国の板書の写しでもなかった。

——この先に記されていることは、正直信じられないようなことだと思うけど、全部本当のことなので、必ず最後まで読むように。必ずだ！

殴り書くように埋められた冒頭文の先にあつたのは、5月6日から始まる日々の記録だった。

図書館でバニーガールに出会ったこと。

七里ヶ浜駅で意図せず再会できたこと。

自宅に招き入れ、怒らせてしまったこと。

私にまつわる思春期症候群についての相談と考察。

南条アナウンサーとの取引。

買い物して、焚きつけて、引っぱたかれて、デートの約束をした夜のこと。

デートの日。遅刻と、七里ヶ浜での母とのやり取りと、大垣までの長旅。

それは日記と呼ぶには冗長で、日誌と呼ぶには主観的過ぎるものだった。

私と出会ってから咲太の視点で起こったこと、感じたことの全てが記されていた。

忘れるな。忘れても思い出せ。覚えていろ。絶対に忘れるな。

記憶に残せ。覚えているはずだ。忘れられるはずがない。

記録の端々で語り掛けるように、刷り込むように何度も何度も重ねられた言葉があった。

爪跡を残さんとする訴え。祈りにも似た叫び。

「馬鹿……」

悪態が、無意識に喉を震わせた。

眠気と体調の悪さでボロボロになっていったのだろう。目を追うごとに文字は乱れ、読みにくくなっていった。

残していたんだ。もしも自分が力尽きて忘れてしまっても思い出せるように。

思い出せなくても、それでも何かのきっかけになるように。

泥臭く、なりふり構わず、できることの全部をやろうとしてくれた。

5月27日。昨日の日付を最後に日記は終わっている。

その日のできごとについてを、読むことができなかった。

「——くない……」

掠れた声が、耳朶を打った。

震えて、みっともないそれが自分の声であることを自覚できたのは、歪んだ視界の先の文字が上手く形を結んでくれなくなってからだ。

足に力が入らなくなつて、砕け崩れるようにへたり込んだ。

何かから守るように、大学ノートを胸に抱え込む。

「消えたくない！」

日記を見て、この3週間の日々が目の奥に浮かんで、思い知らされてしまった。

いや、本当はわかっていた。諦めることなんてできるわけがないって。

利口な振りしてこれが最善だなんて、これでよかっただなんて受け

入れられるわけがない。

これからだっただんだ。

芸能界に復帰して、ドラマや映画もやりたかった。

まだ挑戦したことないけれど、舞台も踏んでみたかった。

芸能界には尊敬できる人たちがたくさんいた。また会いたかった。

良いお仕事をしたかった。

それを多くの人に見てもらいたかった。認められたかった。

脚光を浴びることに無関心で芸能人なんて続けていられない。

またやりたいことがたくさんあった。

続けていききたいことがたくさんあった。

これから始めたいことがたくさんあった。

なにより——。

『僕は絶対忘れない』

消えてる場合じゃないと強がったあのとき、ハッキリとそう断言した人がいた。

私なら何だってできるって、明日の天気でも予想するように背中を押してくれた人。

生意気で、不躰で、凶太くて、それでも優しい後輩がいた。

私がいくら振り回しても嬉しそうな顔して、そのくせときには生意気にも反撃してきて。

そんなやり取りがくすぐったくて。

「さくた……」

細く、小さく、名前を呼ぶ。

大事な宝物をそつと手の中にしまい込むように。

ただ彼といたい。

これからも、彼と一緒にいたい。

他の何が叶わなくても、誰に忘れられてもいいから。

——私を忘れないで。

それは建前も気遣いも恥も外聞も放り出して、心の底に残っていた桜島麻衣の願いだっただ。

* * * * *

枯れるほどに声を上げて泣く経験は、初めてだった。

喉の奥がヒリヒリする。鼻の奥がツンと痛い。

演技で泣くことはあっても、やはり心のどこかでは冷静だったのだろう。

あの人に裏切られたときですら、怒りで奥歯を強く噛みしめることはあっても、こんな大号泣はしなかった。

こんなときですらこの経験は今後に生かせる貴重なものだなんて、考えているのだから我ながら呆れる。

そう。心はもうわかつていいる。自分が何をしたいか。

消えてる場合じゃない。

今更過ぎるけれど、もう本心から目を逸らしている場合じゃない。

結局、咲太の部屋にずっと留まっていた。

長くなると思っていた夜は、咲太の寝顔を眺めているだけであつたという間に過ぎ去っていた。

少しだけ、起こさない程度に悪戯もした。私を思い出した咲太が悶々と悔しがる程度に。

妹さんに起こされて目覚めた咲太は、私の目論見通り、私のことを綺麗に忘れていた。

登校準備をしている際に、例のノートに目を通していてもいたが、やはり思い出すことはできなかつたようだ。

記憶にない女性との日々を綴った日記に読んでいる咲太の得も言われぬ表情は、カメラに収めておきたいぐらいに愉快だった。

ご丁寧にも私の名前だけが読めなくなっているようだった。

記憶も、都合の良いように書き換えられてしまっていた。

まるで絵のところどころにできた空白を、想像力で埋めるように。人の持つイメージの力は偉大だ。人ひとりの存在など消えても、いくらでも上手く辻褄を合わせてしまう。

日記を躊躇いなくゴミ箱に捨てられたときは、胸が軋んだ。

放り込まれたのは、紛れもなく私との日々だった。

いよいよ世界に取り残された現実を突きつけられている気分だった。

それでも、まだ耐えることができた。

俯いてる場合じゃない。

妹さんに見送られて学校へ向かう咲太の後を、私はついていった。

電車の揺れに合わせて、鼓動が大きく跳ねた。

峰ヶ原高校へ向かう電車の中。

腰越を超えたあたりで、咲太とハッキリ目が合った。

誰かに呼ばれたかのようにハツとするように私のいる扉側へと振り返るこげ茶色の瞳に囚われる。

それは本当にほんの一瞬のことだったけれど。

私の視線が一瞬でも咲太の第六感に触れたのだろうか。そうだったらいいなと思う。

それとも咲太の中に、私にまつわる何かが残っているのだろうか。そうだったらもつといいなと思う。

不意に唇の熱を思い出して、そっと触れる。頬の熱さを自覚した。そうしながら、また友達と親しげに益体もない会話を繰り返しているブレザーの背中を、遠巻きに眺める作業に私は戻った。

「……愛ねえ」

温度感に欠ける声で、そう呟く咲太。

別に本日2時間目の現国の問題を解いているわけではない。

始業前、電車に乗り合わせた友人とはまた別の子から受け取った手紙を読んでいたのだ。

確か、双葉理央さんだっただろうか。1人だけの科学部員。

いつでも白衣を着用していることが有名で、名前ぐらいは知っていた。

友人がふたりもいる、と誇っていた咲太のもうひとりの友人だろうか。

そういえば、日記にも登場していたと思いつく。

思春期症候群について、咲太が相談を持ち掛けていた。

咲太の手の中でヒラヒラと弄ばれている手紙の内容を、再度盗み見る。

——これは、観測理論の荒唐無稽で空想科学的な拡大解釈だけど、あらゆる物質は誰かに観測されることで、この世界に物質としての形が確定すると仮定する。

その場合桜島先輩の消滅が、全校生徒の無自覚な無視に起因するのであれば、それを上回る存在理由を梓川が作り出せれば桜島先輩を助けることは可能かもしれない。

要は、見たくないものに蓋をして、桜島先輩を形が確定するまでの確率であり波の状態……すなわち、存在が定義づけられる前の空気のような姿に戻して、最初から存在していなかったことにした全校生徒の無意識を、梓川の愛が上回ればいいという話だよ。

確かに、四角四面の難解な文章だった。

“保証”と“保障”の違いも怪しかった咲太では、きちんと理解するには少し荷が重いかもしれない。

これも彼の昨日までの足掻きが作った、私までの手がかりなの？

彼は眉を顰めて、手紙を眺めてる。私は、そんな彼を眺めている。状況は何一つ好転の兆しを見せない。それでも、彼の残した私への残骸は未だに残っている。

だから——私も覚悟を決めることにした。

* * * * *

雲ひとつない快晴だった。

HRのチャイムが鳴るよりも前に、私は峰ヶ原高校のグラウンドまで足を運んでいた。

トラックの片隅。野球場のバックネットに身体を預けて、そのときを待っている。

「こうして見ると、ホントに箱みたいね」

褪せた白色の学び舎。凸型の形をしたそこは、確かに人を呑み込む箱だった。

同年代の思春期の子たちが百人単位でコミュニティを形成する場所。

法的に大人とは認められず、されど子どもじみた振る舞いが許されなくなってきた子どもたちの箱庭。

多種多様なようで、否が応にもどこかで意思統一がなされた、猫を覆い隠す実験箱。

私は、かつてここで空気になろうとしていた。

誰の目にも触れず、誰からも構われず。

入学当時に集まった好奇の視線も知らないふりをして、私は無色透明な存在になろうとした。

傷口に触れられたくないから。本当はやりたいことを子どもじみた衝動で放り出した自分を突きつけられたくないから。

そんな私に応えるように、遠巻きな視線は鈍くなり、私は存在そのものがタブーになった。

横切ることが不吉とされる黒い猫のように。

空気を読んでくれたのだ。

何度目かのチャイムが鳴った。

恐らく試験2時間目。さっきまで聞こえていた遠い気の緩んだ賑わいが、嘘のように静まり返っている。

箱の中で誰の目からも観測されなくなった黒猫。

その末路は、きつと衰弱死だ。

寂しい、辛い、寒い、恋しい、苦しい。

孤独という毒が全身を回って、窒息してしまう。

だからここで待つことにした。

私なりに考えた、彼の行動。

彼が私を思い出したときに、どんな行動に出るか。

場所は学校のグラウンドか校門前か。

何となく、彼ならこつちを選ぶ気がした。

校門前より校舎が一望できる場所。相手にしようと思えば、威圧的で圧倒的な存在感を放ち立ちはだかっている。

悟ったようなこと言って、上手く立ち回れる能力があるくせに。

こういうとき、きつと一番泥臭い戦い方をするだろうから。

私は彼に賭けることにした。都合の良い希望的観測。そのとおり。

そもそも他の手段なんて私の手の中に残されていないのだ。

身体を壊す手前まで続けた無茶苦茶な不眠も、忘れるなど説き続けた日記も、双葉さんが考えた推測の手紙も。

私を取り戻す全ては、彼が奔走してかき集めたものだろうから。

きつと私のこれからにまつわるすべては、もうすでに私のものではなくなくなっているから。

彼は全身全霊で行動してくれた。
だから私の全てを、彼に託そう。
それが、私の覚悟。

幼少の頃から大人たちの中で生きてきた桜島麻衣にとっては初めてだろう、「誰かに身を委ねる選択」。

今日がダメなら、明日も待とう。

1カ月でも、半年でも、1年でも、3年でも、10年でも。

たとえ死も生もあやふやなまま、フワフワと現世を漂う幽霊になつたとしても。

彼が思い出すその日を待ち続け、この世界を彷徨い続けていよう。
いつか孤独の毒が私を殺すその日まで。

そう思っていた。

——靴音が聞こえた。

慌ただしく、取るものも取らぬ勢いで、駆ける人の音。
けれどそれはきつと空耳だ。

だってその人影は遠く校舎から、こちらに向かって走ってくるもの
だったから。

それでも、確信があった。

こんなテストの真っ最中に。

誰もいないグラウンドの真ん中で。

手を膝について、肩で息をして校舎に正対している背中。

それでも都合の良い夢を見ている気分だった。

こんなこと他に誰がするだろう。

こんな非常識な「空気の読めない」行動をする生徒がこの学校に何人いる。

見間違えようがなかった。

胸に何かがこみあげてくる。

それが喉の奥につかえて、呼吸のやり方さえわからなくなる。

遠くで居住まいを正している背中がぼやける。

それでも右手に触れた熱い涙に乗せた弱さを捨てるように、目元を拭った。

無理矢理にでも大きく息を吐いて、気持ちを落ち着けた。

思った以上にあつさりとできてしまった。

できないわけがない。

こんな緊張、こんな高揚。似たようなことは今までテレビカメラの前で散々経験してきたのだから。

私は、桜島麻衣。

全国的にも老若男女、知らぬ人などほとんどいない子役上がりの元女優だ。

凜として品行方正。

人の親が子どもにしたいと、小さな少女が姉にしたいと、思春期の青少年が恋人にしたいと注目を集めた芸能人だ。

そして生意気で、凶太くて、優しい峰ヶ原高校の2年生梓川咲太の、わがままで、女王様気取りで、気分屋な先輩。

胸を張ろう。

彼が取り戻してくれる世界で、私は相変わらずきつと桜島麻衣だから。

諦めることなく望み、足掻き、そして連れ戻してくれた咲太に、釣り合ういつもの桜島麻衣で。

「お前ら、よく聞けーっ！」

グラウンドの真ん中で、咲太の声が木霊している。

——どこかで箱の蓋が外れる音が聞こえた気がした。

2巻「青春ブタ野郎はプチデビル後輩の夢を見ない」以降

私の先輩を紹介します

あたしが「先輩」という形容だけで誰かを指し示すとき、それは梓川咲太先輩のことをいう。

峰ヶ原高校2年1組、出席番号は1番。

いつも半分くらいしか開いていない眠たげな瞳と、少し猫背で気だるげな歩き方が特徴。

学校の先輩で、バイト先の先輩。

今どきスマホも持っていない原始人みたいな人。

尻を蹴り合った仲。

繰り返す日々を、ともに過ごした人。

かつての嘘の恋人。

* * *

先輩は学校で凄く浮いていた。

中学時代に暴力事件を起こしたとかで、峰ヶ原には滑り込む様に二次募集で入学。

それでも以前の噂は拭いきれなくて、孤立してしまっただけ。

1年であるあたしからすると、そんな噂の又聞きの中の人だった。

先輩の認識に大きな変化が起きたのは5月の中間試験。

試験2時限目の最中に、学校のグラウンドのど真ん中で、先輩は声を高らかに告白した。お相手はあの元芸能人の桜島先輩。

大胆、ありえない、常識外れ。

いつそ何かの番組の企画だと言われた方が納得の、大告白劇だ。

1年の間でも当人のいないところでは暫く話題になった。『イタイ人』とかの嘲笑も多くあったけど、中には好意的な意見も少なくなかった。

少なくとも、1学年の隔たり越しでは確証のない噂を上書きする程度の影響力があつたと思う。

それでも、今度はあの桜島先輩との関係もあつて、やっぱり浮いてしまつていたが。

ちなみに、このときあたしは先輩の名前もきちんと知らなかった。

基本的に、廊下とかで見かける先輩はひとりで、5回に1回ぐらいの割合で国見先輩と一緒にいる感じ。

正直あたしだったら肩をすぼめて消えてしまいたくなるような状況。なのに先輩はケロリとしていた。

以前国見先輩にそのことについて話したら、「咲太は心臓が鉄できてるから」と笑つていた。

「じゃなきや、中間試験中にグラウンドで告白なんかしないだろ」なんて、納得。

皮肉と信頼と愛好が混ざつたような、口ぶりだった。国見先輩が先輩の話をするときは、なんだか少しいつもと違う。

誰にでも優しくして、親しみやすい国見先輩が、このときばかりは少し無遠慮になる。

決して悪しざまに人のことを言う人ではないから、国見先輩がこの手の冗談の的にする相手なんてあたしは先輩くらいしか知らない。

男の子同士の気安い関係、つていうのだろう。女子のグループでは一手間違えると関係にヒビが入るかもしれないやり取りを、先輩と国見先輩は肩をぶつけ合い笑いながらしている。

本音と冗談が、弁解の必要もなく通じ合っている。漫才じみたやり取りは阿吽の呼吸。そして結構な割合であたしは巻き込まれる。だいたいあたしが弄られるのだ。

先輩は、あたしをよくからかう。

あたしたちが初めて出会ったやり取りについて、「尻を蹴り合った仲」なんて懐かしむ。

あたしの尻を『桃尻』なんてセクハラまがいのことを平気な顔で言う。

胸のポリウームに関して言ってきたり、体重についてシレッと言及することもある。本当にデリカシーがない。

先輩はあたしにいらぬことを言って、あたしは反論する。言葉尻を捕えて上手に揚げ足を取る先輩に、さらにあたしはムキになる。

『相変わらずだね、梓川は』

そう呆れていたのは、双葉先輩だ。

先輩の数少ない友人。国見先輩とも仲がいいらしい。学校で白衣を常用しているとか。

この人も、1年の間で変な噂が流れるぐらいには奇特な人だ。

たびたびバイト先のファミレスにお客さんとして来てくれる。

先輩も頼りにしてる人らしい。つまり、あたしと先輩の間でかつて起こったトラブルについて、知っている人だ。多分。

そのせいか、オーダーを取るときに一言二言会話する程度の間柄になっただけ。

そうになると、共通の話題は先輩になるわけで。

『人一倍空気が読める癖に、敢えて読まないなんてことができるんだからほんとヤな奴だよ』

下唇を突き出しながら、そんなことを言っていたのが印象に残っている。

そう。先輩はホントはその場の状況や、空気を読むことができない人だ。それもかなり正確にだ。

それはたぶん、ある程度先輩を知っている人みんなの共通見解だろうと思う。

あたしとのやり取りでも、あたしが本気で嫌がる一歩手前で、先輩はヒラリと身を引く。

その距離感の取り方は、デリカシーが皆無な先輩らしくないほど丁寧だ。

双葉先輩ともそんな調子らしく、きつと桜島先輩に対しても、先輩は変わらないのだろう。

歯に衣を着せぬ物言いだから、みんな気づかない。そもそも先輩もその誤解を解く気もない。

わかる人だけ、わかっているしてくれればいいと思っているのだろうか。なんだか先輩らしい。

からかったり、冗談言ったり、空つとぼけてみせたり、空気をぶち壊したり。

何でもない顔で失礼なことをいう恐れ知らずな先輩は、その実、そんな対人関係について物凄く神経質なんじゃないかとあたしは思う。

生まれつき人の表情を見るのが上手いとか、いわゆる「勘が良い」とかじゃないだろう。国見先輩のように、息をするように自然体で誰とも調和を取れるような類とは少し違う。

どこか確信的で、だけど先輩自身意識していないような。

誰かに歩調を合わせるとか、その場のムードに乗じるといいう方向ではない。

ただ目の前の人と自分。ふたりの間の間合いに対して慎重なところがある

真剣なんだ。真面目に不真面目。何気なく放つ言葉で距離を測る。

デリカシーのない物言い、偽りない自分を相手がどう見るかを伺うような。

一気に距離を詰めて、自分から身を引いたり、少し怒らせて相手から突き放させたり。

そうやって、双方が無理のない関係を先輩はいつも作ろうとしている気がする。

先輩は、周りの視線や空気を気にするあたしを度々馬鹿していた。

誰にも嫌われることのないように、なんて無理な立ち回りをするあたしを自分には理解できない考え方と言っていた。

けれど、そうやって必死になって余裕のないあたし自身は、否定しなかった。

否定しないことを、きちんと明言した。

『そのバカげたルールの中で、お前、必死に生きてるんだろ？ ならば力にはしない』

心底軽い調子でそんなことを言っていた。

そのうえで「バカだとは思うけど」なんて台無しな自分の本音も付け加えるところが本当に先輩。

けれど今になって思えば、先輩こそ大概面倒な立ち回りをしているのだ。

一見大胆で、そのくせ物凄く繊細な人付き合いをしている。

さらにそれは誰に褒められるやり方でもない。酷く手間ばかりかかる立ち回りだ。

少し前まで「空気を読もうとする」ことを先輩は嫌っているように思っていた。

けれどももしかしたら先輩は「みんなが空気を読むこと」より、それによって「誰もが同じ顔をしている」ことがたまたま嫌なのかもしれない。

れない、と思うことがある。

あたしたちは誰かが明言したわけでもない、暗黙のルールを誰もが逸脱しないように守り続けていることがある。

法に触れるわけでも、倫理に悖る行為というわけでもないけれど、それを犯すと周囲から白い目でみられるような。

誰もちやんとした理由の説明できないルール。理由も、意義も見いだせないから、それを考えることすら避けるようになるようなルール。

考えなければ、意識しなければ、タブーの対象そのものをないものと思えば、触れずに済むから。

そうやって感覚を麻痺させて、みんなが似たような、賢しらで物わりの良い素知らぬ顔をしてしまう。

先輩が嫌なのは、そんな誰もが仮面じみた表情なのかもしれない。同じ顔、同じ表情、同じ空気。

誰もが同じ面をかぶった教室を想像する。皆姿勢正しく座って、何も書かれていない黒板を注視している。

端の席で先輩だけがつまらなそうに、窓の外の風景を見ていた。
つまらない？ ……いや、寂しい？

くちばしを尖らせた横顔に、不意に思い起こしたのはそんな感情。

そっか。//だからなのかもしれない//。

だから身近な人を少し怒らせたり、ときに呆れさせたり。

そうやって自分の大事な人たちの表情を引き出そうとしているのかもしれない。

楽しくないから。寂しいから。

確証はないけど、そんな気がしてきた。

そんな気がしてくると、だんだんそうとしか思えなくなってくる。

「が」

だけどうして、そんな風になったんだろう。

何でもない顔をしている先輩を取り巻く環境は、傍目から見ただけで実は結構複雑だ。

過去のいじめが原因でお家から出られないという、妹さん。

先輩の告白の直後に、2年間の活動休止から芸能界復帰した桜島先輩。

スマホを持たない先輩。

お母さんが妹さんの件で参ってしまったって、親元を離れ未成年2人で暮らしている。

6月のあたしたちの間の出来事を、先輩は「思春期症候群」だと断言していた。

あたしたちの年代特有の科学的説明が難しい不思議な出来事を、そんな風と呼ぶ都市伝説がある。

先輩はまるで以前、体験したことがあるかのような口ぶりだった。

たぶん先輩は思春期症候群に以前も何らかの形でかかわったことがあるのだろう。

あの時の先輩の確信めいた口調の力強さは、今になればそうとしか思えない。

思えばあの中間試験の告白劇。知れば知るほど普段の先輩らしくない行動だと思う。

けれど同時に、凄く先輩らしい行動だとも思う。「ある7月7日に七里ヶ浜駅で「僕は童貞だ」と叫んだ先輩を思い出す。

先輩は大それたことをいつでも考えて実行する人じゃない。

それでも先輩は必要だと思ったら、やれてしまう行動力のある人だ。

もしかしたら過去の「思春期症候群」の何かが、先輩を今の「梓川咲太」先輩たらしめている重要な出来事だったのかもしれない。

「……い、こが」

たぶんあたしが訊けば、先輩はもう少し踏み込んだ事情を教えてください。だろう。

先輩が凄く嫌な気持ちを押し殺すときにする無表情な顔を一瞬見せて、少し悩んで、それでもきつと教えてくれると思う。

先輩は、自分が不必要な人と思った人とは本当に関わろうとしない。

学校で大多数の人から腫物みたいに扱われても苦にせず、自分にとって大事な人だけの付き合いを大事にしようとする。

そうすることが先輩にとって自然体なのだ。

冷たいとかではなく本当に、ただ無関心なだけなのだ。そこに好悪の感情もない。

別に自分に無関係なその大多数が理不尽に不幸を願ったりはしない。

本人に聞けば「なんでそんな面倒くさいことを？」と聞き返されるだろう。

まあ敵対する相手に容赦もなさそうだけど。

そういう先輩の中で、あたしは少なくともそういうの立ち位置じゃないと、自惚れでもなく確信している。

その程度にあたしたちが繰り返した6月は、乗り越えた7月18日は軽いものじゃなかったから。

だからこそ、あたしは先輩のそういったことについては知ろうと思えなかった。

だってそれはきつと、＼あたし＼の距離から少し逸脱した領域なのだ。

あたしは先輩の後輩で遠慮のいらぬ友達だから、先輩が抱えてい

るそういうモノを担う役割とは違うのだ。

こんなことを考えていけば、先輩は「また面倒なことを考えてる」と笑うだろう。

けれどそんな先輩にとつてのあたしが、桜島先輩や双葉先輩とは違った形で先輩の中で唯一無二の存在になれると思うから。

——だって先輩はあたしを。

「古賀、呼ばれたら返事しろって」

「おおういいい！ せんぱい!？」

不意に後頭部に軽い衝撃が降って来て振り返ると、今まで思考の中を独占していた梓川先輩本人が立っていた。

右手は五本指が骨からピシリと伸びきっていて、あたしを襲ったのはその手刀なのだとわかる。

「バイト中ボーっとしてるなって。あと30分もしたら波来るぞ」

レジ横の掛け時計を目にすると、確かにもう少ししたらピークタイムに差し掛かるところだった。

月末でもない平日とはいえ、夕食時になればそれなりにお客さんで賑わう。

持て余していた時間を潰すように、必要以上に磨いていた銀食器を仕舞い、先に行く先輩を追いかける。

バイト中の先輩は、実は結構優秀だ。

国見先輩みたいに、誰とでも積極的にコミュニケーションと取って

仕事を円滑にするタイプじゃないけど。

実は目に見えないところで、先輩が気の利いた仕事をしていたというところが少なくない。

溜まった使用済みデザート食器や調理器具の洗浄・片付けとか、いつの間にか終わらせていたり。

先輩がシフトに入っている日といない日で、ホールの裏方の仕事の負担量が目に見えて違ったりする。

水場仕事に慣れてるらしい。本当に妹さんと二人暮らしなのだと思いき知らされる瞬間。

ときどきあたしや国見先輩に任せてひとりで楽しってるようなときもあるけど。

曲がりなりにも接客業なせいとか、先輩自身もきちんと伸びた背筋でお仕事をしている。

いつもこの調子なら、もっと周りの目も違うと思うんだけど。

「なんだよ。いつも以上にボサツとしてたけど、考えてるのは今日のまかないか？」

「先輩、いつもあたしが食べ物のことばっか考えてるとか思ってる？」

「また変に周りに気を遣って悶々としてるよりかは、そっちの方が健康的とは思ってる」

「なにそれ？ なーんか回りくどい言い方っ」

「どーせまたクラスの別の女子グループと微妙な関係になりそうで氣い揉んでるだろ」

「……先輩、どこから聞いたの」

「お前国見にボロっと漏らしたろ。アイツなんであんな氣廻るんだ？」

「その氣廻しを、先輩は本人に向かって聞いて台無しにするんだ」

「国見もその辺は諦めてるって」

「先輩はもっと氣遣いとかの努力しなって」

具体的には「わかりやすい」氣遣いの努力だ。

先輩本当に面倒くさい。

「それに、もうそんな前みたいなことにはなっていないよ」

そんな自分の言葉が、不思議なぐらいハッキリと自分の中を通りぬけた。

以前のあたしなら、決して言えなかったであろう言葉を。

顎を引き上げて、きちんと先輩の顔を見て、あたしは言った。

それは6月の日々に先輩があたしにくれたモノ。

目には見えない、勇気とか覚悟とか自信とか、優しきとか、愛情とか。

多分どれも声に出せば恥ずかしい色々なもの。

先輩はそんな大事なものを、まるで当たり前のようにあたしに渡してきた。

ぶつきらぼうに、無作法に、不躰に、それでいてあたたかいいくつものモノ。

それがいまのあたしをきちんと二本の足で立たせている。顔を上げさせている。

「……古賀も大人になったなあ」

「なにそれ。ばりむかー」

明らかに小ばかにしたような言い方で歩調を早める。

それは先輩なりの照れ隠しなのだ、今のあたしならわかった。

* * *

あたしが「先輩」という形容だけで誰かを指し示すとき、それは梓

川咲太先輩のことをいう。

学校の先輩で、バイト先の先輩。

今どきスマホも持っていない原始人みたいな人。

尻を蹴り合った仲。

繰り返す日々を、ともに過ごした人。

かつての嘘の恋人。

初恋の人。

初失恋の人。

あたしすら見捨てようとしたあたしの想いをきちんと受け止めてくれた人。

仲良くなんでも話せる友達。

ちよつと甘えられる年上の友達。

あたしの歳の違う親友。

あたしを、以前より少しだけ大人にしてくれた人。